ユーモア表出と自己受容, 攻撃性, 愛他性との関係¹

塚脇 涼太 樋口 匡貴 深田 博己 広島大学

Relationships between humor expression and self-acceptance, aggression, and altruism

Ryota Tsukawaki, Masataka Higuchi, and Hiromi Fukada (Hiroshima University)

The structure of humor expression was clarified and its relationships with aggression, altruism, and self-acceptance were examined. In study 1, college students ($n = 216$) responded to a scale with items about humor expression. An exploratory factor analysis indicated three types of humor expression: aggressive, self-disparaging, and playful humor expression. In study 2, 119 college students responded to items about (a) humor expression, (b) aggression, (c) altruism, and (d) self-acceptance. The results showed positive relationships between aggressive humor expression and aggression, self-disparaging humor expression and self-acceptance, and playful humor expression and altruism.

Key words: humor expression, self-acceptance, aggression, altruism.

The Japanese Journal of Psychology
2009, Vol. 80, No. 4, pp. 339-344

我々は対人場面においてユーモア (humor) を生起させるために多様な表現を用いる。また, ある者は皮肉やかからかいといった攻撃的な表現を, ある者は自己の失敗や未熟さの笑い話といった自虐的な表現を用いるなど, そこには個人差がみられる。ユーモアとは面白さや可笑しさなどの心的現象であり, 皮肉や自己の失敗談などのユーモアを生起させる刺激をユーモア刺激という (上野, 1993)。本研究では, 個人が表出するユーモア刺激の規定因として人格特性を取り上げ, その影響を検討する。

これに関わる研究として, 上野 (1993) と宮戸・上野 (1996) は, 個人がどのようなユーモア刺激を好み, 表出するかを測定するユーモア志向尺度を開発した。この尺度は三つの下位尺度から構成される。攻撃的ユーモア志向では, 皮肉やかからかいといった攻撃的な形態のユーモア刺激を, 遊戯的ユーモア志向では, 駄洒落や言葉遊びといった遊戯的な形態のユーモア刺激を, 支援的ユーモア志向では, 自己や他者を支援するためのユーモア刺激を好み, 表出する傾向を測定する。上野 (1993) は, 攻撃的ユーモア志向は攻撃性と, 遊戯的ユーモア志向は愛他性と正の相関を示すこ

とを明らかにした。

その後, 国外において Martin, Puhlik-Doris, Larsen, Gray, & Weir (2003) は, 個人のユーモアスタイルを測定するユーモアスタイル質問紙 (Humor Styles Questionnaire: 以下 HSQ とする) を開発した。HSQ は四つの下位尺度から構成される。親和的ユーモア (affiliative humor) は, 主にジョークを言って周囲を笑わせる傾向を, 自己支援的ユーモア (self-enhancing humor) は, 主にストレスfulな状況で自己を支援するためにユーモアを使用する傾向を, 攻撃的ユーモア (aggressive humor) は, 主にからかいによって他者を非難し攻撃する傾向を, 自己破滅的ユーモア (self-defeating humor) は, 主に過度な自虐を用いて周囲を笑わせる傾向を測定する。HSQ と攻撃性, Big Five などとの関係を検討した結果, 親和的ユーモアと自己支援的ユーモアは外向性, 開放性と正の相関を示した。さらに, 自己支援的ユーモアは神経症傾向と負の相関を示した。攻撃的ユーモアと自己破滅的ユーモアは攻撃性と正の相関を, 調和性や誠実性と負の相関を示した。さらに, 自己破滅的ユーモアは神経症傾向と正の相関を示した。

これらの研究は, 個人が日常生活でどのようなユーモア刺激を表出するかを分類して測定化し, 人格特性との関連を検討した先駆的な研究である。しかし, 以下に示すいくつかの問題点が指摘できる。

第 1 に, ユーモア志向尺度および HSQ に共通する

Correspondence concerning this article should be sent to: Ryota Tsukawaki, Department of Psychology, Graduate School of Education, Hiroshima University, Kagamiyama, Higashi-hiroshima 739-8524, Japan (e-mail: tsukawaki@hiroshima-u.ac.jp)

¹ 本研究の一部は, 日本心理学会第 72 回大会, および日本グループ・ダイナミクス学会第 55 回大会にて発表した。

問題として、下位尺度間で測定する概念が異なることが挙げられる。宮戸・上野 (1996) の支援的ユーモア志向尺度と Martin et al. (2003) の自己支援的ユーモア尺度では、支援的な動機に基づいてユーモア刺激を表出するかを測定する。しかしその他の下位尺度では、からかいや駄洒落などのユーモア刺激を表出する形態を測定する。このような異なる概念を同等に扱い比較することは問題である。今後の研究では、ユーモア刺激を表出する形態と動機という概念を区別して尺度を構成し、人格特性との関係を検討する必要がある。

第 2 に、上野 (1993) と宮戸・上野 (1996) が作成した 3 種のユーモア志向尺度を構成している項目の中には、自己のユーモア刺激の表出と、他者によって表出されたユーモア刺激の感知とが区別されずに混在していることが挙げられる。この点については上野 (1993) 自身も指摘しているが、今後の研究ではユーモア刺激の表出と感知を区別し、尺度を構成していく必要がある。

第 3 に、Martin et al. (2003) による自己破滅的ユーモア尺度は“私はジョークを作っているときや、楽しくなろうとしているとき、よく自分を犠牲にすることに夢中になる”のように、過剰に自己を犠牲にする内容の項目から構成されている点が挙げられる。Martin et al. (2003) の研究から、自己破滅的ユーモアはネガティブな人格特性と正の関連を、ポジティブな人格特性と負の関連を示すことが明らかにされている。しかし、Allport (1937) や Maslow (1954) などの人間性心理学派の理論家は、自己の未熟さや欠点をユーモア刺激として表出することが、成熟した健康な人格者の特徴であると述べている。この見解は Martin et al. (2003) の結果と矛盾するが、項目が過剰に自己を犠牲にする内容のものであるため、結果が歪曲している可能性が高い。自虐的なユーモア刺激の表出と人格特性との関連を検討するには、過剰な自己犠牲表現を改善する必要がある。

以上の議論より、本研究では“他者あるいは自己に対して、意図的にユーモアを生起させるためにユーモア刺激を表出する言動”をユーモア表出 (humor expression) と定義し、人格特性との関係を検討することを目的とする。前述のように、ユーモア表出と人格特性との関係を検討するに当たり、ユーモア刺激を表出する形態と動機という概念を区別する必要がある。本研究では Freud (1960) などの過去の理論家が、ユーモア刺激を表出する形態と人格特性との関係を強調して論じてきたという背景を踏まえて、まずはユーモア刺激の形態に焦点を当てた検討を行う。この目的に沿い、研究 1 ではユーモア表出をユーモア刺激の形態から構造化し、その尺度化を試みる。研究 2 では、研究 1 で作成された尺度と後述の人格特性との関係を検討する。

研究 1

ユーモア表出がユーモア刺激の形態からどのような構造に整理されるのかを明らかにし、尺度化を試みる。

方法

調査対象者 国立大学の学生 234 名に対して集合法による調査を行った。有効回答数は 216 名 (男性 119 名、女性 97 名、平均年齢 20.8 歳、 $SD=1.66$) であった。

質問項目 先行研究 (Martin et al., 2003; 上野, 1993) を基に、ユーモア刺激を表出する形態に関する 24 項目を作成した。その際、自虐的なユーモア刺激の形態に関しては、過剰に自己を犠牲にする表現は避けるよう留意した。“1. あてはまらない”から“5. あてはまる”までの 5 件法で回答を求めた。

結果と考察

天井効果が生じた 1 項目を分析から除外し、計 23 項目に対して最尤法による因子分析を行った。固有値の推移と累積寄与率から判断して、3 因子解が妥当であると判断した。そこで 3 因子解を指定し、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。どの因子にも負荷量が .40 に満たない項目と複数因子に .40 以上の負荷量を示す項目を削除し、分析を行った結果の最終的なプロマックス回転後の各項目の因子負荷量を Table 1 に示す。

第 1 因子は“人を軽く皮肉ったりする”や“人をからかうようなユーモアを言う”など、上野 (1993) による攻撃的ユーモア志向尺度、Martin et al. (2003) による攻撃的ユーモア尺度と対応する因子であると解釈され“攻撃的ユーモア表出”とした。

第 2 因子は“自分の欠点を笑いのタネにして話す”や“人と比べて劣っているところがあっても笑いのタネにして話す”など、Martin et al. (2003) による自己破滅的ユーモア尺度と対応する因子であると解釈され“自虐的ユーモア表出”とした。第 1 因子と第 2 因子は、攻撃の方向性が他者か自己かで分離したと考えられる。

第 3 因子は“わかりやすい駄洒落を言う”や“人と単純な言葉遊びをする”など、上野 (1993) による遊戯的ユーモア志向と対応する因子であると解釈され“遊戯的ユーモア表出”とした。

3 因子解での因子的妥当性を検討するため、確証的因子分析を行ったところ、 $GFI=.914$, $AGFI=.875$, $RMSEA=.045$ と高い適合度が示された。各下位尺度の内的一貫性を検討するため、クロンバックの信頼性係数を算出したところ $\alpha=.75-.83$ と十分な値が示さ

Table 1
ユーモア表出の項目に対する因子分析結果(プロマックス回転後)

項 目	F1	F2	F3	h^2
攻撃的ユーモア表出($\alpha=.83$)				
きついことを言って笑いにする	.71	.00	-.06	.50
人を軽く皮肉ったりする	.69	-.04	-.08	.46
人をからかうようなユーモアを言う	.65	-.05	.01	.42
多少毒かおるユーモアを言う	.64	.09	-.06	.43
人をちゃかして笑いをとる	.61	-.02	.06	.38
過激な冗談を言う	.59	-.07	.15	.39
ブラックユーモアを言う	.58	.15	.01	.38
自虐的ユーモア表出($\alpha=.82$)				
自分の欠点を笑いのタネにして話す	.05	.78	.01	.63
人と比べて劣っているところがあっても、笑いのタネにして話す	.06	.67	-.01	.47
自分の未熟さを笑い話として人に話す	-.10	.62	.11	.42
自分の失敗談で笑いをとる	-.01	.62	.11	.42
自分に起こった不幸な出来事でも笑い話にして言う	.03	.60	-.11	.35
日常で災難にあっても、それをおもしろおかしく人に話す	.01	.56	.04	.32
自分の弱点を笑い話にはしない	.13	-.53	.10	.27
自虐的なユーモアを言う	.24	.47	-.09	.29
遊戯的ユーモア表出($\alpha=.75$)				
単純でわかりやすいユーモアを言う	-.14	.13	.70	.54
わかりやすい駄洒落を言う	.14	-.06	.64	.44
人と単純な言葉遊びをする	.15	-.11	.61	.40
奇抜ではなく、素朴なことを言って笑いをとる	-.22	-.09	.54	.30
言葉の語呂合わせで笑いをとる	.29	-.04	.53	.40
ほのぼのとしたユーモアを人に言う	-.13	.21	.48	.32
因子間相関				
	F1	—	.14	.13
	F2	—	.24	

れた。

以上の結果より、ユーモア表出はユーモア刺激の形態から3種類に整理されることが確認された。下位尺度の因子間相関は比較的低い数値であることから、個人のユーモア表出の独立した側面を測定していると考えられる。

研究 2

研究1で作成された尺度を用いて人格特性との関連を検討する。先行研究ではBig Fiveといった人格特性の全般的傾向や過去の理論家による論考を検証するための特定の人格特性が扱われている(Martin et al., 2003; 上野, 1993)。本研究ではこのうちの後者の立場から、以下に示す三つの人格特性について検討する。

まず、人間性心理学の理論家がユーモア表出との関係について最も多く言及してきたにも関わらず、未だに検討がなされていない自己受容(self-acceptance)を取り上げる。自己受容とは“ありのままの自分をそ

のまま受け入れること”(沢崎, 1993)と定義される。Allport (1937)は成熟した健康な人格者のユーモア表出は、自己の未熟さや欠点をユーモア刺激として表出するものであり、自己の否定的な部分を客観視することによって生まれると述べている。北村(1978)は、自己の客観視は自己受容と同じ現象であるという見解を示している。Maslow (1954)は、健康な人格者の特徴として、自己の未熟さをからかうことと、そのような未熟さを自己受容することを挙げている。Maslowはこの二つの特徴の関係について直接言及してはいないが、Allport (1937)による考察に基づくならば、自己の未熟さを客観視し、受容することによって、それをユーモア刺激として表出することができるようにと考えられる。自己受容尺度としては、Berger (1952)や沢崎 (1993)などが有力であるが、上述した自己の未熟さや欠点の自己受容を的確に捉える尺度が確認できなかったため、本研究では予備調査によって独自に作成する。

次に、攻撃性と愛他性を取り上げる。Freud (1960)

Table 2
自己受容の項目に対する確証的因子分析結果

項 目	標準化係数
自分の弱さを抵抗なく自然に受け入れている	.864**
自分の弱点を一步退いて楽しみながら眺めることができる	.773**
自分の風変わりなことや失敗を、楽しみながら見つめることができる	.757**
自分には欠点があるが、それを受け入れている	.663**
自分には良くない部分があるが特にそれにとらわれてはいない	.515**
自分の弱い部分と向き合って生きている	.504**
自分の欠点が別のものではあればよかったのにとよく願う	-.405**
自分の弱点や欠点を隠すため、長所や良い面を見せようとする	-.294*

** $p < .01$, * $p < .05$

注) GFI=.906, AGFI=.833, RMSEA=.077

$\alpha=.811$

以降、ユーモア刺激の表出や感知は攻撃性と密接に関連していると論じられてきた。攻撃への動因を社会に受け入れられる形で低減するためにユーモア刺激の表出や感知が行われるという理論である。その後の理論家は、この点を部分的に認めつつも、ユーモア刺激の形態によっては思いやりや善意といった愛他性が規定していると指摘した (Berger, 1997)。これを実証的に研究したのが上野 (1993) であり、前述のように、皮肉やからかいなどを表出や感知する傾向である攻撃的ユーモア志向は攻撃性と、駄洒落や言葉遊びなどを表出や感知する傾向である遊戯的ユーモア志向は愛他性と正の相関を示すことを明らかにしている。本研究では、ユーモア刺激の表出に概念を絞った場合でも、同様の結果が得られるかを再検討する。

予備調査

本調査で使用する自己受容尺度を作成する。その際、従来から自己受容尺度は社会的望ましさの影響を受けやすいことが問題点として指摘されているため、この点についても検討を加える。

方法 国立大学の学生 67 名に対して、集合法による調査を行った。有効回答数は 63 名 (男性 12 名, 女性 51 名, 平均年齢 20.8 歳, $SD=1.40$) であった。質問紙の構成を以下に示す。(a) 自己受容に関する項目では、自己の望ましくない属性に対する自己受容の重要性を強調している Allport (1937) と Maslow (1954) の記述を抜粋し、質問項目として適切な形に修正した。計 13 項目。“1.あてはまらない”から“5.あてはまる”までの 5 件法で回答を求めた。(b) 社会的望ましさ尺度では、Crowne & Marlowe (1960) の社会的望ましさ尺度の邦訳版 (北村・鈴木, 1986) から 30 項目を使用した。“はい”もしくは“いいえ”の 2 件法で回答を求めた。

結果と考察 各項目と社会的望ましさ尺度との相関

係数を算出し、 $r=.30$ 以上を示した 2 項目を社会的望ましさの影響を受けやすい項目として除外した。残りの 11 項目に対して、1 次元性を仮定した確証的因子分析を行った。ワルド検定によって、有意でない係数を示した 3 項目を除外しながら分析を行った結果、GFI=.906, AGFI=.833, RMSEA=.077 と許容できる適合度を示した (Table 2)。8 項目での内の一貫性は $\alpha=.811$ と十分な値であった。以上より、この 8 項目を自己受容尺度として以後の分析で使用した。なお、最終的な自己受容尺度と社会的望ましさ尺度との相関は $r=.22$ (ns) であった。

本調査

ユーモア表出と自己受容、攻撃性、愛他性との関連を検討する。先に述べた考察より、以下の仮説を設定した。自虐的ユーモア表出は自己受容と、攻撃的ユーモア表出は攻撃性と、遊戯的ユーモア表出は愛他性と正の関連を示すであろう。

方法 私立大学の学生 121 名に対して、集合法による調査を行った。有効回答数は 119 名 (男性 40 名, 女性 79 名, 平均年齢 19.7 歳, $SD=0.90$) であった。質問紙の構成を以下に示す。(a) ユーモア表出形態尺度は、研究 1 で作成された尺度を使用した。計 21 項目。(b) 攻撃性と愛他性の測定尺度は、EPPS (Edwards Personal Preference Schedule; Edwards, 1953 肥田野・岩原・杉村・福原訳 1970) の攻撃欲求と養護欲求の各項目を尺度として使用した。各欲求 9 項目, 計 18 項目。攻撃欲求の項目例は“自分と反対の意見の人を攻撃したい”や“人からばかにされたら仕返しをしたい”であり、養護欲求の項目例は“友だちが困っているときには、助けてあげたい”や“自分より不幸な人を助けたい”である。(c) 自己受容尺度は、予備調査で作成された尺度を使用した。計 8 項目。以上の項目は全て“1.あてはまらない”から“5.あては

まる”までの5件法で回答を求めた。

結果と考察 まず、攻撃性尺度と愛他性尺度の構造と信頼性を検討した。両尺度共に1次元性を仮定した確認的因子分析を行った。愛他性尺度では全ての項目が有意な係数を示し、適合度は $GFI=.927$, $AGFI=.874$, $RMSEA=.075$ であった。攻撃性尺度では有意でない1項目が除外され、適合度は $GFI=.945$, $AGFI=.901$, $RMSEA=.058$ であった。内的一貫性はそれぞれ $\alpha=.804$ と $\alpha=.726$ とほぼ満足できる値であった。以上より、愛他性尺度9項目、攻撃性尺度8項目を以後の分析に使用した。

三つの人格特性がユーモア表出を規定するというモデルを構成し、共分散構造分析を行った。潜在変数を構成する項目は研究1と研究2の因子分析の結果から最も負荷量が高かった3項目を使用した。ワルド検定によって有意な影響がみられなかったパスを削除しながら同様の分析を繰り返した結果、 $GFI=.889$, $AGFI=.855$, $RMSEA=.029$ と許容できる適合度が示された。最終モデルをみると、攻撃性は攻撃的ユーモア表出に正の影響 ($\beta=.46$, $p<.01$) を、愛他性は遊戯的ユーモア表出に正の影響 ($\beta=.37$, $p<.05$) を、自己受容は自虐的ユーモア表出と遊戯的ユーモア表出に正の影響 (順に $\beta=.76$, $\beta=.50$, $ps<.01$) を及ぼしていた (Figure 1)。

以上、仮説は概ね支持された。まず、攻撃性は攻撃的ユーモア表出を規定していた。Freud (1960) が述べるように、攻撃への動因を皮肉やからかいなどのユーモア刺激を表出することで昇華していると考えられる。また、愛他性は遊戯的ユーモア表出を規定していた。駄洒落や言葉遊びなどのユーモア刺激は、陽気な気分や雰囲気醸出 (上野, 1992)。愛他的な性向の者は、思いやりや善意に基づき、周囲の気分や雰囲気を良好にするために遊戯的なユーモア刺激を表出すると考えられる。さらに、自己受容は自虐的ユーモ

ア表出を強力に規定していた。自己の未熟さや欠点などの望ましくない属性を客観視し、受け入れることによって、それをユーモア刺激として表出することができるようになると考えられる。ただし、自己受容は遊戯的ユーモア表出も規定していた。Allport (1937) は、成熟した人格者の自己受容に基づくユーモア表出は駄洒落やからかいとは区別されると述べており、この指摘は本研究の結果と矛盾している。遊戯的ユーモア表出の位置づけに関しては今後のさらなる検討を要する。

総合考察

本研究によって、ユーモア表出はユーモア刺激の形態から、攻撃的ユーモア表出、自虐的ユーモア表出、遊戯的ユーモア表出の3種類に整理されることが確認された。この結果を基に尺度を作成した結果、高い内的一貫性と因子的妥当性が示された。この尺度を用いることによって、従来の研究で混同されていたユーモア刺激を表出する形態と動機を分離し、形態に焦点化して詳細な検討を行うことが可能になったと言える。また、人格特性とユーモア表出との関連を検討した結果から、攻撃性が高い者ほど攻撃的ユーモア表出を行うこと、自己受容度が高い者ほど自虐的ユーモア表出と遊戯的ユーモア表出を行うこと、愛他性が高い者ほど遊戯的ユーモア表出を行うことが明らかとされた。このなかで、自己受容度が高い者ほど自虐的ユーモア表出を行うという結果は、Allport (1937) による考察を初めて実証するものであった。すなわち、先行研究の知見 (Martin et al., 2003) と異なり、自虐的ユーモア表出は適応的で精神的に成熟した人格者の特徴である可能性が示されたと言えよう。

今後の展望と課題は以下の点である。本研究で3分類されたユーモア表出は、因子間相関が低く、それぞれが異なる人格特性と関連を示したことから、ユーモ

Figure 1. 共分散構造分析による各人格特性からユーモア表出への因果モデル
注) 数値は標準化係数。愛他性から遊戯的ユーモア表出へのパスは5%水準、その他は全て1%水準で有意。 $GFI=.889$, $AGFI=.855$, $RMSEA=.029$

ア表出の独立した 3 側面であると考えられる。ユーモア表出に関する今後の研究では、この 3 分類を考慮に入れることが有効であろう。

また、ユーモア表出の動機に関しては先行研究では断片的にしか扱われておらず、実証的な解明もなされていない。今後の研究ではユーモア表出を動機の側面から構造化し、人格特性との関係を検討する必要がある。さらに、ユーモア表出の形態と動機は相互に関連して人格特性と関係している可能性がある。Lampert & Ervin-Tripp (2006) は大学生の友人集団内の会話分析から、皮肉やかからかいなどの攻撃的なユーモア刺激が、他者と親密になることを動機として表出されると指摘している。このような動機に基づく表出と、字義どおりの攻撃を動機とする場合とでは、関係する人格特性が異なる可能性がある。今後の研究では、このような発展的な課題にも取り組んでいく必要があるだろう。

引用文献

- Allport, G. W. (1937). *Personality: A psychological interpretations*. London: Henry Holt Company.
- Berger, E. M. (1952). The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 778-782.
- Berger, P. L. (1997). *Redeeming laughter: The comic dimension of human experience*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Crowne, D. P., & Marlowe, D. (1960). A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, **24**, 349-354.
- Edwards, A. L. (1953). *Edwards personal preference schedule*. New York: The Psychological Corporation. (エドワーズ, A. L. 肥田野 直・岩原 信九郎・杉村 健・福原 真知子 (訳編) (1970). EPPS 性格検査用紙 日本文化科学社)
- Freud, S. (1960). *The standard edition of the complete psychological works of sigmund freud*. Vol. 8. (Trs. & Ed. by J. Stachey) London: Hogarth Press. (*Der witz und seine beziehung zum unbewussten*. 1905 Wien: Deuticke.)
- 北村 晴朗 (1978). 総説人間の心理 南窓社
- (Kitamura, S.)
- 北村 俊則・鈴木 忠治 (1986). 日本語版 Social Desirability Scale について 社会精神医学, **9**, 173-180.
- (Kitamura, T., & Suzuki, T. (1986). Japanese version of social desirability scale. *Japanese Journal of Social Psychiatry*, **9**, 173-180.)
- Lempert, M. D., & Ervin-Tripp, S. M. (2006). Risky laugeter: Teasing and self-directed joking among male and female friends. *Journal of Pragmatics*, **38**, 51-72.
- Martin, R. A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being: Development of the humor styles questionnaire. *Journal of Research in Personality*, **37**, 48-75.
- Maslow, A. H. (1954). *Motivation and personality*. New York: Harper & Row.
- 宮戸 美樹・上野 行良 (1996). ユーモアの支援的効果の検討——支援的ユーモア志向尺度の構成——心理学研究, **67**, 270-277.
- (Miyato, M., & Ueno, Y. (1996). An examination of support function of humor: Construction of a preference scale for supportive humor. *Japanese Journal of Psychology*, **67**, 270-277.)
- 沢崎 達夫 (1993). 自己受容に関する研究(1)——新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討—— カウンセリング研究, **26**, 29-37.
- (Sawazaki, T. (1993). A study of self-acceptance(1): Examination of reliability and self-acceptance scale in adolescence. *Japanese Journal of Counseling Science*, **26**, 29-37.)
- 上野 行良 (1992). ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について 社会心理学研究, **7**, 112-120.
- (Ueno, Y. (1992). Studies of humor phenomenon and classification of humor. *Japanese Journal of Social Psychology*, **7**, 112-120.)
- 上野 行良 (1993). ユーモアに対する態度と攻撃性及び愛他性との関係 心理学研究, **64**, 247-254.
- (Ueno, Y. (1993). The relation between the attitude toward humor, aggression and altruism. *Japanese Journal of Psychology*, **64**, 247-254.)

——2008. 2. 25 受稿, 2009. 5. 16 受理——